

土 淨



天章
元

二 月 號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換承認雜誌第三五二號
昭和三十一年一月二十五日印刷 昭和三十一年二月一日發行

第二十四卷

第二號

卷頭言

私が少年期を過した北國の町では、二月十五日の釋尊の涅槃會になると、寺々は宗派の別なく、本堂に涅槃圖を掛け、佛前に、あられを供え、傍の器物にもたくさん入れ、茶碗を一ヶ添えて、參詣を待った。參詣の主は街の子供達である。雪の道を手にく適當なかんぶくろを持つて、寺々のあられをもらいに廻る。

このあられが、"おしやかさんのはなくそ"と呼ばれる。本堂には戸締りがない。自由に入つて、めい／＼で茶碗に一杯づつ、袋へ入れる。そして、お坊さんの姿は見えないが、ふしぎな畫に、じつとひとみをかゞやかせて一時、又、次の寺へ廻る。畫では、おしやかさまの死を悲しむ人々、動物の姿が、特に心をひいたようで、何となしに、釋尊の偉らさが、説明なしに受取られたと思われる。そういう事からか、それとも"はなくそ"の利益か、いつもは恐るべき子達も、殊勝に、乱暴をするものもなく、彼等の寺廻りを済ませるのである。そして、今後は、花祭に、一升瓶を持つて甘茶をもらいに行くのを楽しみに待つのである。

佛教は、我國では方便で生かされて來た。方便というと、大へん廣く解釋され、難かしい意味づけもあります。要するに、正しい佛教の信仰をよりたやすく持てるようになり、更に持ちつゞける方法であり、形式であります。"はなくそ"の方便は、子供心に、佛の大きさ、佛への親しみを培うよすがともなり、子を通して、親達へも、涅槃會の意味を傳えた事でありましょう。どうして、そんな名前で呼ばれたかはわかりませんが、親しみのある言葉だと思う。

あすき念佛以來、このような信仰への導きの理念は、時と所と人によつて相應しく展開される事によつて、佛教の教が、我々に消化される。(眞野龍海)

ね は ん

—死をこえるもの—

竹 中 信 常

沙羅樹サハラの下にみほとけは、北を枕に、はるか入日する西に面おもてをおむけになつて、靜かに横たわられた。尊師の病い篤あつしときいて、佛弟子達は、遠近からはせ集まつて、みほとけの枕頭にむらがつた。人間のみでなく、凡ゆる鳥やけだものも、慈悲あふるるみほとけの入滅を悲しんで、ひそやかに、その森の棲家すまかを出て、人々の後に集まつて來た。偉大なる魂の消え去ることの悲しみは、ひとり人間世界だけのうれいではなく、いきとし生けるもの、すべてにとつてのものであつた。

まことに、八十年前の、ルンビニーの花園での喜びは、これまた、すべて、いのちを持てるものよろこびであつた。丁度、それとは反對に、今日のかなしみは、いのちを

持つあらゆるものにとつての悲しみなのだ。

みほとけのおうまれが、全世界にとつて、大いなる光明であつたのだが、今日は、八十年にわたつて輝きつゞけた。この光明も、いまやまさに、消えなるとし、いのちあるすべて、のものは、その後に来る、無限の闇を眼前にしていかなしみと、うれいと、それにもましたおののきとを、心の底から感じたのである。このおののきにたえかねた、みほとけの弟子の一人がきいた。

「みほとけよ。いまや、あなたはわたくしどもを残こして、ねはんに入ろうとなされています。あなたが去られたのち、一體、わたくしどもは、何をたよりにしていき行けばよいのですか。どうして、おなくなりなされねばなら

ないのですか」

胸をつくような、悲しい聲であつた。

みほとけは、いまや、みづからのいのちの終末のせまつたことを、はつきりと自覺された、静かなお聲で答えられた。

「ともよ、悲しむことはない。いのちあるものは必らず

死すべきものなのだ。かたちあるものも、いつかは、きつと、いづれ去らねばならないのだ。わたしのいのちも、わたしのかたちも、例外ではない。むしろ、大きな法則のままに、その法則に従つて、死に去り、消え去つてこそほとけなのだ。けつして悲しむにはあたらぬ。

また、何をたよりにするかと問うがそれならば、一體今までは、何をたよりにして來たのか。わたしの、この五尺の肉體をたよりにして來たのか。あるいは、わたしが説いて來た、おしえをたよりにして來たのか。

つねに、説きしめして來たではないか。すべてのものはうつりかわると、ただ一つ、かわらぬものは、すべての

ものはうつりかわるといふことを示した、わたしの言葉のみである。

弟子達よ。うつりかわるわたしの肉體と、決してかわることなき、わたしの教えた法と、いづれがたよりになるかわらずとも知れようものを。

さらば、弟子達よ。わたしの説きあかした法をたよりと

しその法を體得した、おまえ達自らの叡智をたよりとしてわたしの亡きあと世のすべての、心貧しきもの、心惱めるもののあかしとなつて、すすんでくれ」

みほとけの、最後の言葉に引つゞいて、人類が始めて經驗する、そして、未來にわたつてつきることのない、壯嚴にして、悲愴、憂愁にして至福なるみほとけのねはんが人々の眼前に展開したのである。

二月、きさらぎ。地上の、ありとあらゆる木々は、素裸に寒々と立つ。地面は未だかく凍りついて、いきもののけはい一つない、荒涼たる風景である。その自然の苛酷なる姿そのままが釋尊の入滅のうえに寫されたのである。

ねはん頌詩

増谷文雄・佛教聖典より

心ゆるぎなき救済者は、

はや入る息も出る息もない。

欲なき者となり、寂靜にいたり、

聖者はいま滅したもうた。

動^{ゆる}がない心をもつて、

よく苦しみに耐えたまい、

燈火のきゆるがごとく、

心の解脱をとげられた。

る。

余の人は知らぬ。わが師だけは、偉大なる佛陀釋尊のみはいかに峻嚴な死の運命も面を伏せて近よらぬであらう。そのみおしえとともに、尊師の肉體だけは永遠に地上の生を享けてゆかれるであらう。そうとしか思えぬ程に、みほとけの此世における日常の生活は威嚴にあふれ、自信にみちていた。そのみほとけが、今、自分達の目の前で、老いおとろえ、そして、夏の虫の晩秋の野に息たえるが如くに入滅の相を現じられた。あまつさえ、みほとけみづからのお口から、おのれの死にゆくことこそ、大いなるみおしえに従われることにほかならないことをおおせられたのであるから、弟子達のおどろきと悲しみとが、大空の廣さにまして大きく、大海の深みにもまして深かつたことは想像するに餘りあるものである。

私共は、この現實にしつかりと目をむけなければならぬ。―すべての形あるものはくすれ去り、すべてのいのちあるものは死に去らねばならぬ。―いやしくも、佛教といふものを少しでもかちつたものにとつて、これくらいのことにはわかつてゐる。理窟でわり切つてゐる。しかし、本當にわかつてゐるのだろうか。本當に割り切れるだろうか。

ある有名な外科醫は、盲腸の手術では屈指の腕前を持つていた。随分むづかしい、手おくれの患者の手術をも、たのまれて、立派にやりとげた。ますます有名になつて、ど

んな患者の手術でも失敗することがなかつた。ところがある時、その外科醫のたつた一人の愛兒が盲腸になつて、痛みを訴えてころげまわつて苦しんだ。人々は早速に、父なるその外科醫が執刀するかと思つたが、外科醫はちつと腕を組んで、愛兒の痛みを自らの身に感ずるが如き、悲痛な面持ちをして動こうとしなかつた。そして、最後に、とうとう友人の醫師をたのんで手術をして貰つたのである。醫師としては、どんな患者に對しても、冷靜にメスがふるえても、父としての彼には、どうしても愛兒の腹にメスを立てることが出来なかつたのである。

私共は他人の死については、その現實をよくみきわめることが出来る。しかし、愛する者の死に臨み、はたして、冷嚴として、「諸法は無我なり」と悟走し得るであらうか。湧きあがつてくる、悲しみ、いとしさ、さびしさの心をおさえることが出来るだろうか。

みほとけの涅槃に際して、なげき悲しんだ弟子達の心をわたくしはもつともだと思ふ。いや、むしろ、そうあらねばならないとも考える。悲しむべき時に悲しみ、喜ぶべき時に喜ぶ。これこそ、佛の道を行くもののありうべき姿なのである。悲しい時に笑い、嬉しい時に怒るのは、人をあざむく前に、おのれをあざむくものといわなければならぬ。むしろ、佛教者は、ありのままなる姿においてこそ、佛の道を體現してゆくべきであり、みほとけの入滅に際し

ては、聲をかぎり、涙の泉の涸れるまで泣くべきが本當であらう。

佛陀の降誕を四月八日にことほぎ、佛陀の成道を十二月八日によみした私共は、喜んでのみいるべきではない。悲しむべき時にはすなおに悲しみの心を以つて、この涅槃の現實に對決しなければならぬ。

近來、この國の佛教のことを、寺院佛教、葬式佛教、法事佛教と自嘲し、日本の佛教がおとろえたのは死人を相手にしているからだという。おどろいたことには、佛教者自身の中にすら、こういった事をきくのである。それなら、その人々にとつて、佛教は、一體どのようなものであつたのならよいのであらう。生れること、成育すること、結びあうこと、このような喜びの面だけに佛教を限つて、明るい佛教とでもしたら満足なのであらうか。

わたしはそうは考へない。佛教こそ、いや佛教のみが「死」という偉大なる現實に立ちむかえる唯一のものだと思ふ。ほかのことはあえて佛教に限らず、他のもの、たとえば道德・倫理・藝術・學問などでも事足りる。ただ「死」のみは、他のなにものによつても解決のつかない、永遠の謎として人間の前に與えられているのである。この「死」をのりこえて行けるものは、佛教をおいて他にはない。

人々が悲しみとうれいに打ち沈む死の宴に臨んで、人の痛みをわが體に感じ、人の悲しみをわが心に抱いて、その

打ちひしがれた人々の心をやさしくなぐさめ、ふるい立つ力をわがち與えることの出来るものは、佛教でしかない。

わたしは「葬式佛教」を卑下しない。最愛の人を失つた涙の淵にある人と、手を取り合つて共に悲しんでやれる、この佛者にして、眞の佛教者といえるのではないだらうか。人生の最大の悲しみの機會に際して、心の底から共に悲しんでやるところに、眞の意味での佛教の意がある。すなわち、佛教以外の他の凡ゆるものは「死」に際して、死そのものにこだわつて、そこに立ちどまつてしまふが、佛教は「死」をのりこえてすすむ道を教えるのである。淨土門では、これを佛の國極樂への道であると説く。「死」につき當つて立ち止まらない。死を門として、これをくぐつて、永遠の未來に前進する。どうして、佛教が死について、これを回避することが出来るよう。反對に、佛教は「死」を説くことによつて始まり、それを通じて永遠の大法、「涅槃寂靜」に到達したのである。

みほとけの涅槃こそ、このことを、みほとけ自身、身を以つて説き示めされたにほかならない。みほとけにして、その肉身が永遠に生きつゞけていたならば、そのみおしえたる佛教は、私共の手には残らなかつたであらう。みほとけは、みづから涅槃に入られたことによつて、眞のみほとけの姿を、永久に人人の胸の中に生かしつゞけられたのである。

働く人々への説教講話

— 其の一 —

生きた宝



谷 部 禪 雄

“念佛を信ぜん人はたとへ一代の法をよく／＼學すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智の輩に同ろして智者の振る舞をせずして只一向に念佛すべし”

御一同様には、何にかと御仕事の多い中、其の疲れも癒やす暇も割愛して、よく御参詣下さいました誠に結構な事と心から御喜び申し上げます、一般の人々は兎角映畫や歌謡曲踊り觀劇物見遊山等には無理をしても出席しますが斯様な集いには仲々都合がつかぬ様であります。然るに今席の集りは全く尊い事と頭が下ります、五十二代嵯峨天皇が最澄

に“國の寶とは如何なるものか”との御下問に對して“道心有る者を國の寶と申します”と御答へ申上げました。道心とは佛の教では菩提心と云いますが、此れはだらしの無いい心を入れ替て立ち上ると云う事で例へば親を粗末にして居た者が此れでは相濟ぬと親を大切に不勉強な者が勉強に仕事に精を出す氣持に變つたと云うのが其れであります。國の寶には種々あります得難い品物美術工藝品建築文化財等數へ來れば際限が有りません。併し生きた寶とは眞の人間らしい人と云う事であります。さて私は此處で三つの寶と云う題で皆さんこそ本當の生きた寶で有つて望しいと御

願ひ致し度いので御座います。人間は如何なる人でも此の三つの寶を生れつき持つて居るので有ります。

一「解る事」 生れてより長するに及び日と共に智慧づき祖父母父母兄弟等の導きにより小學中學上級と進みつゝ各方面に涉り智識を與へられる此れが解る寶です、だが如何に智識が有ると申しても眞に世の爲め人の爲めに生かす事で無くば無價值なものになります。例へば大學や専門學校を出たと云つても詐欺、横領竊盜殺人強盜汚職等を敢へてして恥じとしない人は解つて居ない人々です。此れと反對に世の爲め人の爲めに生かそうと勉める人こそ本當の解つた人生きた寶なのです例へ自分の名前も十分書けぬ人でもです。

(7)
二「働く事」 此の働と云う事にも本當に働く人と半分しか働かないのと二つ有ります。私だからこそ此んな仕事をするのだと恩に着せて働く人、私に斯様な仕事をさせるとは間違つて居ないかと不平不満を云いながら働く人、私に適當な職場が無いと云う人、此れ等は働く事を知らぬ人、洵に愚人と云う可きです。如何なる仕事も皆之れ神や佛、先祖代々よりの篤き仕事なりと喜びつゝ働く事こそ本當の働く人と申すのであります。世には私は主人だから老人だ

から金持だから地位が高いから學問が技能がと仕事に區別をする人々が何時の世にも相當有る様ですが飛んでもない事です。御釋迦様の御弟子阿難尊者が或る晩法の兄弟方に「皆さん今晚一つ御願ひが有りますが如何でしよう」と云うのは阿那律尊者の（此の方は目が見えぬが六神通を得た方）衣が汚れても居るし綻びておりますが私共で洗濯し縫い直して上げ度いと思ひますが、一同双手を挙げ賛成々々致ししようと衆議一決、では誰々さんが何々と手分をして氣持よく仕事に取りかゝる事になりました。さて此の事を靜かに御聞になつておりました釋尊は「阿難よ大變結構な申合せだ、では私は何々を」世尊よ恐れ入ります世尊は佛様です私共の御師匠様です七十五歳の御老體です何卒御休み下さいませ」と釋尊いや佛様でも師匠でも老人でも良き事は如何なる人でも爲す可きだとは私の日頃の教へではないか是非私も仲間へ入れて下さい」と尊い御教訓無條件で頭が下ります。師匠も弟子も心を一つにしての所作此の世の淨土有り難い事では有りませんか、心に銘すべきです。近世の大詩人印度のタゴール翁が或る日寺院の片隅に神に祈る人を見て「汝は幾日間祈つても神を見る事は出来ないだろう、外を見よ道路工事に田畑に農に勵む人々を見よ眞

の神とは働く人だ”と味う可き金言では有りませんか、知つた振を捨て成り上からず。海に山に野に一切の業務に心魂を打ち込んで進むこそ何物にも勝る生きた寶で有ります。

三、“拜む事” 左右の手を靜かに合せて下さいませ左は

佛様右は私共、佛様と私共が一つになつた姿で有ります。

口に出せば南無阿彌陀佛で有ります、右の手は一切を佛様に御托せ致し何卒御救いをと云う素直な姿であります。廣く私共の實生活に當てゝ見ましよう。左は父母右は子供、

左は先祖様右は現在の私共、左は校長諸先生右は男女一切の生徒、左は社長、右は社員、左は夫右は妻等左右ピッタリと合つた姿、此れは協力の姿此の協力こそ一切を育て成し遂げる人生の花であり實で有ります。社會國家家庭を平和にと口では高く叫びますが、結極双方ピッタリと合せて業務に精を出す事こそ此の世を幸福に平和に導くので大言壯語は無用です。此の事が南無阿彌陀佛であります、南無は私共で右の手、阿彌陀佛は左で佛様です。此の佛様は常に南無阿彌陀佛する私共を常に護つてやる育て生かして善きに善きと導き導き、何時でも誰れでも何處でもと御誓い。山野大海原大空地地下數千尺の處でも我が友よと常に離れず苦樂を一緒にして下さる方です。無論横病横死其の

他一切の厄難魔障等も除いて下さる方です。然るに世間には佛様神様先祖父母の御恩なんか未開時代ならいざ知らず自分の力自分の智慧自己の頭で一切を成し遂げる此れが現代の青年壯年の誇りであると威張る人々も相當有ります。然し此れが最も危険な赤信號であります。靜かに反省致しましよう。此の身は父母の御蔭で此の世に生れたのだ幼時より一人前の人間になる迄の御苦勞を、諸先生方一切の敎書一切の物の御蔭等私獨りの力が一體何處に有るか、増長せず廣く天地の大きな盡力に頭を下げる人こそ眞の人であります。ノウベル賞を日本人として、最初に受賞された湯川博士の言葉に“私に與へられたのでは有りません、多くの先輩諸先生方の御研究により私の發表が出来たので諸先生方に與へられたのだ”と誠に立派な流石は世界的な科學者としての面目躍如たるものがあります。野口英世博士も、觀音菩薩の大慈悲と母の大愛と此の不具な手の御蔭で私を人間にして下さいましたと“涙ぐましい尊い言葉では有りませんか。古來南無阿彌陀佛とは死人の供養か冥福を祈るか死後淨土に往生する爲めか世を厭い自殺する時の別れ言葉の様に考へたり思つたりして居る方が昔も今も可成有る様ですが一應は左様な面も多少は有るでしよう。

併し再應は決して左様な事でなく生々とした一切を區別なく活かすのが本當の南無阿彌陀佛であります。阿彌陀佛とは無量の光、無量の智慧、無量の慈悲、無量の生命と、云う事で有ります。豎に永遠横に盡十方であります何んと芽出度い尊い名體では有りませんか、諸佛の御力御慈悲智徳等一切諸菩薩の御働き一切諸經の御功德等も悉く籠つて居るのが南無阿彌陀佛であります。佛教最大最高峰が念佛の教へで、解る事働く事此れに拜む合掌の姿こそ三つの寶此れを持つ人こそ人の中の上々人であり、最勝人であります、念佛する者は常に清淨にして正しく和合の姿、光りの中に生々として此の光に合う者は三垢消滅して身意柔輭なり歡喜踊躍して善心生ずと無量壽經上卷に御示しになつて居ります。此の柔輭心と善心こそ世界の人々を育て守り生かす最大なもの此れこそ世界最尊の信仰の現はれで眞の寶であります。昭和十四年五月廣島縣の或る小學校に頭の下る話がありました、小學校四年生受持の女の先生が修身の時間に今日は先生から皆さんに御聞き致しますが解つた方は御答へなさいね、生徒は一寸と緊張の色を！先生はよろしいですか今日までの間に御家でも外でも學校でも何處でもよろしいが綺麗だと思つた事が有つたら何んでも宜敷しい

から御答へなさい！ハイと手が揚つた、あなたハイ御正月東京の小母さんから妹に講談社の繪本を送つて下さいましたが綺麗な繪本だと思いました。ヨロシイ。

ハイあなた京都の小母さんから進級の祝に京人形を送つて頂きましたが綺麗な人形だと思いました、ヨロシイ。ハイあなた此の間御父さんと櫻の花を見に行きましたか綺麗だと思いました、ヨロシイ。皆綺麗ですな先生もそう思います他にも有りませんか、暫く手が揚らなかつたが間もなく級長が手を、ハイあなた、此の間先生に引卒されて遠足に行きました其の時御寺の御庭で御辨當を頂き御庭で遊んで居りました、すると御寺の門から一人の小母さんが靜に歩るいて御堂の前で止つて兩手を合せて御辭儀をなさいました。先生が其のカツコが何んと無く綺麗だなと思いました。先生は何んにも云はずに頭を下げボトリと露が二つ暫くして良く出来ました、皆さん紙面の都合で此の説明は十分出来ませんが味はつて頂きましょう合掌拜む姿こそ何よりも綺麗な美しいもの人の心を柔輭に一切を抱む大悲の姿であります。「振るまいをせずして唯一向に念佛すべし」との法然上人の御仰せを素直に受け取り生き生きと前進致しましょう。合掌十念！（大本山増上寺布教師常任理事）

働く人々への説教講話

— 其の二 —

働 く 力

後 藤 眞 雄

同じ仕事をしていても、馬鹿に気持ちよく能率のあがる事もあり、骨ばかり折れて少しもはかどらない事もあり、楽な時もあり、疲れる時もある。こんな仕事ばかりして、行く先どうなるのだろうと、何か心細くなる時もある。一寸した苦勞が馬鹿に認められて、明るい気持ちになる時もある。肉體的な疲勞を感じる時もある。精神的な疲れを感じる時もある。自分のしている仕事が本當につまらない仕事の様に思へる事もある。何か社會を明るくする偉大なる仕事である様に思へる事もある。何か自分一人で背負つて立つてゐる様に思い上げる時もある。何かいつも

下積みの、人の土臺にばかりされてゐる、いくじのない小さな自分を見出す時もある。

こんな風に同じ仕事をし乍らも、私達の心は大海の浪の様に、大浪、小浪の變動の中にゆられ、うごめくのである。それに依つて、仕事が楽しくもなり、苦勞ともなり、いやにもなり、張り合いを感じたりもするのである。

楽しく仕事が出来、気持ちよく能率が上がり、軽い肉體の疲勞に、「まづ一寸一ぶく」と一本の莢に火をつける時人生最大の幸福がある様な氣がする。

もとより「一つの仕事」自體にもいろいろありその條件價

値適否によつて異り、「仕事をする」場合でも、氣温、健康、環境等々がかなりに其の氣持を支配するであらう。然しその中に自らを如何に整へて行くかの深い宗教的な反省によつて私達は正しい働く力を見出す事が出来るのである。

◎信 力

最近「ドライ」とか「ウェット」とか云う言葉が流行語になつてゐる様である。今の時世が大なり小なり「ドライ」でなければ生きて行けない時世であるかも知れない。變轉極まらない今日、一寸先きの眞暗な今日、其の時其の時の要領でたくみに、泳ぎ抜くのが今日のリコウな生き方かも知れない、とは云つてもそれが本當の人間の生きる道かと考へたら淋しくなる事だろう。競馬の穴や、寶くじの僥倖だけが何のたよりになるだろう。あたへられた自分の仕事に自信を以て働き得る事が人生の幸福なのである。

私の知人がある會社に入社した、其の當時は日本一の會社であり、先輩は親切であり、課長は親の様であり、社長は神様の様だと云つてゐた。二年程たつたら、「あの會社は大した事はないよ、課長は馬鹿だし、社長は腦なし、先輩は皆、利己主義だ」と惡口を云い出した。誰しも初めて仕事を手にする時は、好奇心も手傳つて、する事なす事、

面白く、目新しい感激を以て働ける、能率もさほど擧らなくとも、まだ慣れないからと自他共に割引いて考へる。少し慣れて來ると、感激も薄くなるし、収入とにらみ合せて考へる様にもなつて來る。他の職業の良い所だけが馬鹿に眼について來る。うちの會社のやり方が惡く、社長が馬鹿に見えて來る時もその時である。自分のしてゐる仕事に自信がもてなくなるのである。そこをふみこたへるのが信念であり、信力なのである。淨土教の信仰は念佛によつて彌陀の慈光の中に働いてゐると云う信念を持つ事だ、苦難の道を経づして大成は望めるものではない。

◎精 進 力

電車に乗るのもいやになり、ペンを持つのもいやになり紙一枚見るのもいやになる時もある。それでもやらなければならぬ自分の仕事は、最少限度に切りつめてやる工夫をしはじめる。馬鹿々々しいと考へて骨おしみをし初める。こんな時に面白味は藥にしたくもなくなつて來る。時間と月給と休日ばかりが頭の中を往來する。そんな時は仕事をしてゐるのでもなければ働いてゐるのでもない。休日になつても本當の休日は來ないのである。そこを今一步ふんばる所に成功がある。そのふんばる力を精進力と云うの

である。

念佛の信仰は彌陀の光明の中にこのいたらぬこの身をさ
らけ出しているのである。念佛するもの誰彼の區別なく平
等に照らされているのである。日蔭もなければ、暗闇もな
いのである。

仕事にいや氣のさして來た時が一番大切な所であり、こ
の壁一重をつき破る時が一步の進歩なのである。人生の行
路は決してやさしい道ではない。この壁を幾重か通り越し
て來たものでなければ仕事をしたとは云へないのである。

淨土の教へがともすると、難行をすて、易行に歸する事
を説く所から、容易な道、樂な道を選ぶ事が教へであるか
の様に誤解されやすいが、決してそうではない。自ら進ん
で難きにつく事を知らぬものに本當の易行は納得出來るも
のでない。難行をして易行たらしむるのが淨土の信仰なの
である。嚴寒の氷をしのぐものにのみ、春の花は咲き、秋
の稔りは約束される。仕事に自信がなく、世の無情にふる
へる様な氣のする時、くまなく照す彌陀の光明を暖かくう
けとれる信仰がたゆもうとする心に精進（はげみ）の力を
與へてくれる。

◎念 力

世の中はすべてスピード化されて來た、昔風の事を云つ
ていたり、考へていたら、どん／＼取り残される様な氣も
し、仕事をし乍らも、唯あせりのみを感じる。齒がゆさを
感じる。一足飛びに目的地についたらどんなに良いかと思
う、コツ／＼と一步一步登る苦勞を知つたもののみが本當
の高さを知る事が出来るのであつて、一度に山に飛び上る
事は出来る筈はない。ミシンでさへも一針一針がたんねん
に配られてこそ、前かけ一枚も縫へるのである。一步一步
の努力、一足一足のたゆまぬ力が仕事を深く掘り下げてく
れるのである。もとより一步に汗をぬぐい、一足に息をは
づませる時もある。

念々に捨てざる彌陀は我が身と共に在り、我と共に歩み
己れと一緒に苦しみ、樂しみ、共に仕事をしていて下さ
るとうけとれるのが念佛の信仰と云へよう。佛と共に……
そこに一念をおろそかにしない力となつて來る。

◎定 力

世の中は自分一人で生活しているのではない。世間皆も
ちつもたれつである。そうすべてが自分の良い様にばかり
はいかない。思はない影響が、豫期しない浪が押しよせて
來る。ぐらついて來る足もとによろ／＼とする。

コツ／＼と固めている何の爲めかわからなくなる様な事もある。どうせ東の風も吹けば西風も吹くのである。どんな風にも目標を失はないのが定力と云う事である。

佛教徒の目的は吾れも又佛たらんとする所にある。自分も佛になれる。いや佛にならずには置かぬと固い信念を持つ事である。この仕事も佛になる爲の仕事、今日一日を佛に近づき、目標に近づく仕事とうけとる時、我が家が出来上つて行く時の様に、完成への楽しみを感じる。自分の事に楽しみを感じている時は定力があるからなのである。自己完成への楽しみは念佛からである。

◎慧 力

とかく世間は新しいものが好きである。その考へは古いとか新らしいとか、新舊ですぐ善惡を決定しようとする。

もとより古いから必ずしも良いわけでもなく、新らしいから良いのでもない。古い美術の中には新らしいものの中に見られない良いものもあり。新らし感覚の中に古いものに見られない良さもある。移り變る世の中で仕事自體も進歩して行き變つて行く、新しさは又更に新らしさを産んで行かねばならぬ。その中には常に工夫、研究が斷へ間なく續けられねばならぬ。如何に努力家でも、盲目的であり獨斷

的であつてはならない。智目のない行足では何にもならない。正しい道理の受け入れられないのは智慧の燈火の足りない事である。信力、精進力、念力、定力の、陰に夫々慧力のかゞやきがなければならぬ。不平や不満に悩み迷うのは慧力の不足から來るのである。

正しい信仰に醒める事である。

以上は阿彌陀經に出ている、『極樂世界の白鵠、孔雀等の諸衆の鳥が晝夜六時に和雅の音を出し、其の音は五根、五力、七菩提分、八聖道分、かくの如き等の法を演暢す』とある所から五力を働く力にあてはめて、述べたのである。

『この諸の衆鳥は、みなこれ阿彌陀佛の法音をして宣流せしめんと欲して、變化してなす所なり。』とも説かれてあります。

淨土の信仰は、信念を以て、勤勉に、謙虛な誠實さに、楽しく、然も常に新らしく、自らの仕事にいそしむ道を示しておる事と思います。

法然上人も「仕事しい／＼念佛すると思うな、念佛しい／＼仕事すると思へ」と云はれた事等思い合せて見ますと、念佛こそが働くものの大きな力となる事を信じて凝はない所です。(大本山増上寺布教師)

頂成攻の日にベンガル灣に發成したサイクロンが荒れに暴れて數日の間航空路の連絡を絶つた上に大雨をもたらし、今年雨年の豫報を裏書きした。この天からの「水」で地上の「火」は随分しのぎよくなつた。この頃までに木綿の花は實を結び熟し切つて自然にはぜた實からは白いわたを飛ばしてゐた。古い記録を見てもギリシャでは綿布のことをガンゼチカと呼ぶのは、何時ごろからの呼稱かは未だ確かめては居らないが、インドのガンヂス河に語源を溯れるのであるなら、この赤い大きい木綿の花はやはりこのベンガルの平原で紺碧の空を背景に咲きほころぶのが一番花の風格に適してゐるのであるのか。次々にいろいろの花が咲く。休暇中の二ヶ月は眞赤なクリシュナ・チューラの花が咲き續いた。七月から三ヶ月新學年に入つて新らしい學生たちとともに過してゐるうちに十月になると一ヶ月のブージャ・休暇に入るのである。例年なればすつかり上つてゐる筈なのに今年はいつまでも續く雨が、最後の止めを刺す様に九月二十一日から五日間をベンガル灣周邊に荒れ狙つた爲に、到るところ大きな水害をもたらし

た。風は二三十米で五日間吹きつづけるエネルギーをもつ今年のサイクロンは、雨の爲にゆるんだ地盤の中から一抱へもある大樹を根こそぎ幾本も引ぬいて仕舞つた。カルカッタの北百哩、そして少し小高くなつてゐるここサンチニケータンは上下鐵道とも不通になつて孤立して仕舞つた。デリー周邊でもヤムナー河の増水から危険地域の退避が始つたほどである。佛陀の聖地ベナレスもガンヂス河の増水から危険が傳へられた。ビハールの各地、アッサムの各地の水害の報が傳へられた。そうした地上の風物とは關係なしに秋は空から始まつた。十月の満月が雲なき夜空を照らす頃から風は北から吹きはじめた。空の雲は消えて再び紺碧にかへつた。

訪問客のかづかづ

カルカッタとかデリーという様な近代的都會以外の電氣もない様なところ、或は電氣の必要のない様な生活をしてゐるインド人の住む家は大體泥小屋である。厚い泥の壁で四周を築いて節くれ立つた竹を組んで屋根組をして蒿を厚く葺いてある。サイクロンの強風で

は殆んど屋根は吹きめくられて仕舞う様だ。ベンガル州ではまだこの泥壁には明りとり窓があるが内陸に入れば窓を作らず室内の涼しい空氣と外側の熱風との交流を許さぬ様にしてゐるらしい。ここサンチニケータンでは私達は南インドのニザム領の人々がタゴール翁の大學創立の趣旨に賛同して寄贈した資金を以て建てられた獨立家屋を與へられてゐた。この家は煉瓦造りである。はじめての夏、私達は風の吹き通る儘に窓を明けたまま過してゐた。夕方太陽が沈んでも、何時までたつても溫度が下らないので内心困つてゐた。インド人の注意があつてあさ十時ごろから窓を密閉する事にしたのである。午後三時までの五時間はどうしても外の熱風を家の内に吹き込ますとすべてのものの溫度がどんどん上つて仲々下らないのである。床はコンクリートが夏の間は心地よい涼氣を保存してゐる。板張りの粗末な寢臺は私の健康の爲には良さそうである。雀が外から毎朝遊びに来る様になつた。棚の上に巢を作つたのち卵を温め出したのを楽しみにしてゐたところ一夜窓から忍び込んだ一匹の猫の爲に追い拂はれて仕舞つ

たのは残念であつた。色々の花が咲き出した三月からあと引きりなしに舞い込んで来る泥蜂のいろいろの種類のものが巢を営みにやつて來た。巻貝の形をして鉛筆位の太さの五厘程のものを六本宛ならべて作つて行くもの、徳利形の小さな壺を三つ宛ならべて作つて行くもの、泥の代りに樹脂を運んで本箱の隅を占領してゐるもの等であつた。ギリシャの文獻を讀んでゐるとヘロドトスが書いて以來、すべての歴史家の間にはインドの蟻について極めて興味ある傳説を生んだのであるが、實際インドの蟻には随分多くの種類がある。芥子粒を幾つかに割つた位の小さい淡褐色の列がぞろぞろと序々に進んでゐるのを見てゐる其の横を、二厘もある様な黒蟻が一匹足早に通り過ぎたりするのであつた。雨期に入つて少しの時間に、少し油斷をしてゐると何時の間にか數百、否數千と云へる程の多くの蟻が卵を運んで家内に進駐して來たりするのであつた。健康上の配慮から砂糖の代りに蜂蜜を用いる私の家庭では皿に水を入れてその上に瓶を浮べることより外に方法がなかつたのであるが、うつかり補水を怠つたりした

翌日は、早くも必ず赤蟻が蜜に酔つて動けなくなつて仕舞つてゐるのであつた。いろいろの蟻の生態を見てゐるうちに蟻は香を追つて歩くのであり、黒の大蟻以外のものは一匹のリーダー蟻の後に従つて同一行動を取つてゐるものの様に思はれて來た。蟻の分類に入る別なものに白蟻がある。インドの白蟻の貪婪さは全く凄い。招かざる客の最も大きなものは蚊である。インドの蚊は全く鋭敏なのであらうか。蚊は微風に抗して飛ぶのであるが、この蚊は蚊張のほんの小さな破れからでも何匹も何匹もぐり込んで來るのであつた。この理由はどうしても判らないのであるが、察するところ蚊張の中の温度が高くなくて、この破れから少しづつ氣流をなして流れるのであらうか。その氣流に逆らつて蚊が泳ぎ込むとしか考へられない。中共とちがうので各州でマラリヤ撲滅のため蚊は殺す藥劑をまいてゐるが、此處では大都會のほか一月という様な最も寒いときでも蚊張が要る。インドの子供たちはインド人全體の宗教的信念にもとづく生物に對する愛情の影響から蟬や蜻蛉をとる様なことはせないのである。私達は近所の

子供たちに教へられて毛蟲を飼つてゐる。十厘にも育つ青虫から二本の大きな角を出した見るも恐ろしいイラ虫のような毛虫に至るまで随分いろいろの毛虫がある。みな夫々美しい蝶や蛾になるまで、幾段かの過程を見とどける爲に子供部屋の中の一部が毛虫の飼育場になつてゐる。そして時々この毛虫が勝手に這い出して行方不明になつて仕舞うのである。これ等こそ招待せられた訪問客の一種であらうか。

——食へものことから——

東北インドのアッサム州から來てゐる女子學生がやつて來て、家に居つた時分には唐辛子類は食べなかつたのに、ここに來て見ると喰へずには居れないと云うのである。南インドのタミール語を母國としてゐる學生がやつて來て、此處の寄宿舎の食事は下手で美味くないと云うのである。良く聞いて見るとビリッとした唐辛子分が少いことに不満があるらしい。私達はインドにやつて來る前の日本生活では腎臓出血のあとでもあつたから唐辛子などを喰へる事は思いもよらなかつた。船

がラトビア籍のマニラ本社の船であつたし、この船は高級船員が比島人で、その他は中國人が主であつた爲に、四十日間の食事はシナ食か西洋食だけであつたので、ここでも減多に唐辛子を味うことはなかつた。けれどもカルカッタで寄泊した二流ホテルでは西洋食が既にインド味であつた。口の中で熱くなつてやがて咽喉から、そして胃の部分にまで熱さの残る様な唐辛子の利きかたであつた。インドの風土ではどうも南に行くに従つてまた内陸に入るにつれて辛さを増すらしい。日本でインド式と云はれるカレー料理は、京都のジャバのものでも、東京のナイルのものでも特別の味はあるけれどもやはり現地の味とは全く異つてゐるのはやはり材料の相違もさる事ながら風土の相違から来る受容者側の情緒の問題も大きく働いてゐるのであるか。インドでは羊の肉が普通に用いられる。滿洲の羊肉のような臭氣はなく、また牛肉のような臭もなく、やはりインドの羊肉の獨特の彈力と色澤と香氣がある。それをブチ切りにしてホルード(黃色)と呼ばれる種類のカレー粉にまぶして置く。一方平石の上に麻の實、大蒜、

玉葱、生薑そして唐辛子を加へた調味料を置いて紡錘形をした石のロールですりつぶす。これを油いためしておいた大蒜、玉葱、馬鈴薯と混じて水を加へ羊肉を入れて二時間も煮きつづけるのである。こういうカレー料理がベンガルの普通のもの様である。羊肉を加へないで玉葱、馬鈴薯だけのものはドームというカレー料理である。漬物類にしても日本の様にあつさりした淡泊ものはなく、どれにでも油が加へられてゐる。この油にでもベジテリアンと呼ばれる野菜主義者用のものとノンベジテリアンと呼ばれる肉食可能者用のものとの別が判きりしてゐる。南インドのバラモン達は絶対に肉食をやらないで、唐辛子の入つた辛い精進料理を右手で手づかみにして喰べるのである。ベンガル州のバラモンは肉食もする、そういうこととは別にインドの國勢調査の記録を検討して見ると南インドだけが同數であるのを除いては男女比率が一割も違ふのである。この事はインドに瀾漫してゐる早婚の惡風による女子の早逝かとも見られて來てゐたが一九五一年の調査記録でもやはり同一傾向であるところから見ると案外にこ

うした食物の嗜好傾向や食糧の材料に原因があるのかも判らない。またインドでも日本と同様に一九四〇年及び一九五〇年を區切るその前の一〇年間の住民の都市集中率を比べて見るとアーメダバードとラクノーの二都市の外は代表的な七大都市では同様に三倍程度に増加してゐる。この事は日本の東京都周邊に、日本全人口の二割五分というものが集中してしまつて將來の對策に困つてゐるのと同じ傾向であるといつてよい。人間の本性のうちにやはり動物時代からもちつづけてゐる群居本能というものが強く働いてゐるものらしい。食と衣と住という三つのパターンを通じて、こうした動物社會に如何なるマス・コミニュケーションを施すかどうかといふところに今後の宗教の新らしい形態があるのではなからうか。本來普遍的宗教としての性格をもつ佛教が如何にこういう社會的現實を把握するかといふところに、今後の佛教の運命が宿命づけられてゐるのではないであらうか。

(筆者は佛教大學教授 インド・サンチケータン大學日本學部部長)

新 刊 紹 介

—現代聖典講話Ⅳ—

佐藤密雄著

『無量壽經講話』



發行所 千代田區神田小川町三ノ八

河 出 書 房

新書版 二八三頁 一五〇圓

物質が恰も生活の糧の全ての如くにしか思ふ餘裕を與え得なかつた時代が過ぎて、人々の歡心は自己内部へと向けられて來た。よりどころを失つた不安定な自己を見詰めた時、私達は、確固たる自己法則を明かにし度いと願わずにはいられないのであります。

この要望に答えて出版されたのが本書であります。衆知の如く「無量壽經」は、淨土教正依の經典の一であるが、單に淨土教の人々の間に止らず、眞言宗、天臺宗等諸々の人々の中に「無量壽經の世界」は操り擴げられています。にも拘らず佛教の難解な語義によつて、その眞意は普及をみていない。

この點本書は、今迄佛教を知らなかつた數

多くの人々の爲に、容易な語法で話を進め、「無量壽經」を説きながらも、佛教の眞髓を語らんとしておられます。いわば、「南無阿彌陀佛」の教えを中心とした「佛教理解の書」であります。

本書の内容は、十二講に分かれます。

第一講に於てこの經の概説がなされ、法藏菩薩の行願とその淨土が第二・三講で詳説され、第四講では、その淨土往生の方法論が展開します。

第五講に於ては「樂」が説かれますが、佛教書見初の人々は、この講に魅力を感じられる事でしよう。

第六・七講に於ては法藏菩薩の四十八願の

性質と、その願が如何に意義有らしめらるゝかが説かれます。

第五講の樂の説明が佛教書初見の人々には魅力が有ろうと申しましたが、それは釋尊の根本の思惟であるからであります。特に佛教と云うものを教授獨特の講説に於て現代的な解釋を加えられたのは、第八講の「迷悟の二界と淨土」に於てでありましょう。人間釋尊の解釋と釋尊を悟りに導いたテーマと佛の意味が鮮かに説かれております。

その點佛教書初見の方には、まづこの講から讀み出されて九・五・十・十一・十二・一・二・三・四・六・七講の次第で理解されるのも一考かと存じます。

第九講で淨土の世界を説き終つて、第十講より十二講迄、印度・中國・日本三國獨特の往生思想を説くに至ります。

著者は大正大學佛教學研究室主任教授で、數多くの著書の中、一般知識人を對照に説かれた本書は特に從來の佛教への迷蒙を破るに足るものであると思ひます。

この書が世に送られた事に、その恩顧を受ける一人として謹んで祝意を表すると共に、本書を佛教指導者のもとより佛教に關心を有する方々に必讀をお勧めする次第です。(I)

ホノルル通信

第八信

ホノルル浄土宗別院にて

松 濤 弘 道

前略 其後皆さん如何お過しですか？ こちらは常夏の國と云つても毎日汗をかく程の暑さでなく、年中おだやかな貿易風が微を掠める位心地よい氣温に恵まれ、何處を見渡しても時々忘れた様にサーッと訪れるシャワー

で樹木も花も清氣に溢れています。黄昏時になるとワイキキの濱の役方に陽が落ちて、その映えた夕空の美しさは又格別で、この海に向うになつかしい日本があるのかと思うと自然と望郷の念に驅られます。こんな時はよく椰子の樹蔭に腰を下して、遠くでかなでるウクレレの音に耳をかたむけながら日本を想出すのです。

一日の大半を學校で過し、言葉も自然と英語ばかりになるのでそんな時は、はたして自分が日本人なのかアメリカ人なのか分らなくなる時があります。評論家の大宅壯一さんだつたか、南米からの歸路の途上、當地に滞在し、その印象記を「週刊朝日」に載せたのを微に憶えています。氏は此處に降りてあまりに日系人が多いのに驚き、且その日系人が日本語を話さないのので丸で日本に歸つたのかそれとも夢の國に來たのか、分らなくなつたと書いていましたが、確かに此處は日本人らしき容姿の人が澤山居ても、若い二世、三世は殆んど日本語を解さないのです。

僕に云わせれば、彼等は顔付が日本人であつても、その精神構造は最早日本人のそれではなく純粹なアメリカ人の物の考え方(Way of Thinking)を持っています。これは精神構造だけでなく、動作 (Behavior Pattern) まで違ふのです。例えば歩き方ですが、日本からの渡航者と彼等では一寸見ても確然たる區別がつくのです。この容易に區別出來ると云う物の考え方、及び、動作の一々の區別の具體的例を掲げていたらきりがないのでこゝでは省略致しますが、實に日本人は僕を含めて古今稀れにみる特種な人種である事が、日本を一步出てみると手をとる様によく分るのです。

この特徴が特に此處の様にあらゆる人種の集散している處では顯著にうかがえ、思わず日本人とアメリカ人との間隔が痛切に感ぜられます。

ではつきつめて日本人獨特の氣質を考えたら何がその生活感情から抽出されるでしょう。これは人々によつて各々解釋が異なる事で

しようが僕自身の考える處どうもその特徴として「義理人情」「滅私奉公」「報恩感謝」の三項目に要約されるのです。最少し碎いた言葉に直せば「忝けない」「勿體ない」「有難い」とでも換言されましようか、どうも日本人の物の考え方はこの三要素によつて代表されていゝとしか考えられませんか。

一般に西洋と日本の區別をするのに前者は「科學的」「論理的」「個人的」「對立的」「外交的」とし、後者を「非科學的」「非論理的」「全體的」「融和的」「内交的」と定義づけていますが、鈴木大拙博士も西洋は「權力」(Will for Power)といふ概念によつて色とられてゐると述べています。そうするとさしづめ日本は權力を融和させる「抱擁力」(Will against Power)と云う概念によつて色とられてゐるとでも云えましようか、特に日本人にはこの抱擁力の傾向が顯著であり、それが今述べた様な「忝けない」「勿體ない」「有難い」と云う三項目によつて代表されると考えられるのです。

はたしてこのどちらの傾向が良いかは早急に決斷出来ませんがもし前者をとるとすれば日本人の没個性的人間觀が西洋の個性的人間觀に敗退する事になり、根本的にこの生活感情を改革せねばなりません。

或る人はこの日本人の持つ「抱擁力」を以つて人類社會の相克對立を調和させる唯一の思考感情だとし、又或る人はそれは前近代的な思考感情であり、人間が人間らしく生きる爲にはあくまで妥協を排し、個々の主張を通すべきであると述べています。

僕が何故にこの様な問題を取上げたかは皆さんも御承知かと思いますが、實は私達佛教徒にとつて、とても重要な問題が潜んでゐるのです。此處で云うまでもなく、日本文化史はそのまゝ日本佛教史と云つていゝ程、佛教の日本人に與えた影響は大なるものがあります。日本人の思考様式が何千年もの間佛教によつて培われたとすれば、佛教徒であろうがなかろうが日本の土壤に生を受けた以上は無意識のうちに佛教の影響を受けています。こ

れは如何に日本が洋化したとはいえそうすぐに拂底する事が出来ません。現今の様な復古と洋化の混沌とした埒場の中にあつて私達が自分のもつ思考様式及び文化遺産を批判し、日本文化(佛教文化)の世界文化史に於ける地位を検討する事はあながち無意義と云えません。この科學的検討なくして日本文化の世帯への鼓吹なく、又洋化への妥當的理由が見出せません。即ちこの日本人の物の考え方を再検討する事がそのまゝ日本文化の再認識にもなり、日本佛教の將來を方向づける指針にもなると思ふのです。こう云う意味に於て今迄八回に亘つて日本人の物の考え方の特徴とその依つて立つ原因と過程とを説明して參りました。多少悲觀的に傾いたおそれはなきにしもあらずですが、これも最初におことわりしていた様に、日本人の弱點である虛榮心(狂信的愛國心)の増長を防ぐ爲でありまして何等他意がありません。しかしこれに倍して日本人には世界に誇るに足るべき良點を澤山持つてゐる事も否めない事實です。

例えば今、頭に浮んだだけでも、その長所として批判的精神の旺盛である事（思いやりの心があついで、そしてより精神的情操が發達している事（自然に對する詩情がある）等が掲げられます。まづ最初の批判的精神の強い事は、おそらく世界を見渡しても日本人以外には一寸無いのではないでしようか。一般的に云つて、その知的好奇心といふ、物の實態を觀察、判斷する能力といふ、日本人程優れた人種は一寸ない様です。（一、二の例外はあつても）。その點アメリカでは物事を容易に信じ考へ方が單純です。そして次の寛容の點に於ては多少の不純な動機があるとしてもよく日本人は人をかばうのに、アメリカではその點冷酷です。困つてゐる人を助け合ふ點ではアメリカはその公德心が發達してゐますが普通の人の間では一大家族主義的零團氣は見當りません。

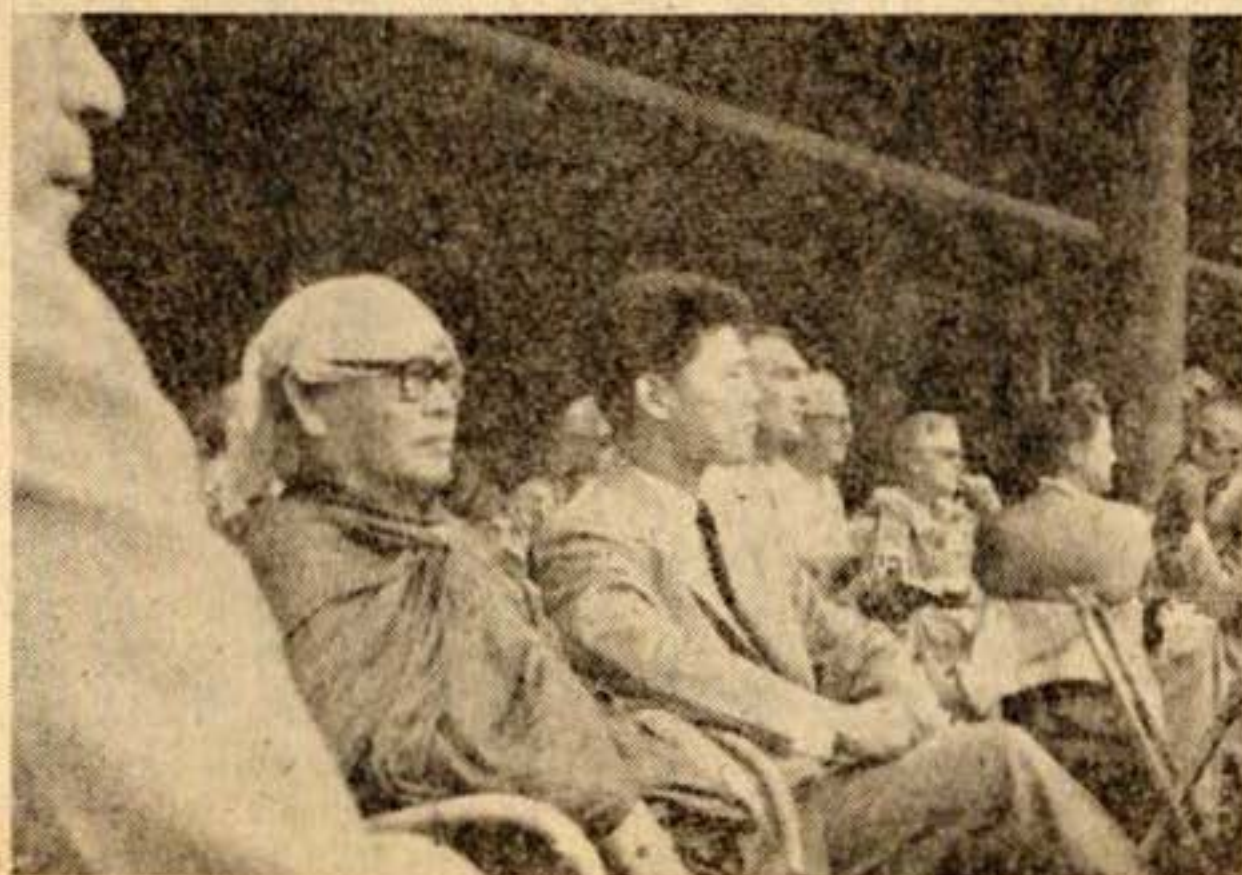
それに精神的情操の面に於て日本人は山川草木に魂を見出しそれに同化する感情が無意識の中に養われていますが、アメリカにはそ

の様な詩情を持つ人は極めて少なく、人間生活の爲に、その自然を征服、活用しようと心掛けます。

この様は互に相反する様な生活感情の差異を経る處で見出す事が出来るのです。そしてその度に、一日本人として良識ある理想人間になるにはどうあらねばならないかと云う事を痛切に考えさせられ、それには今迄の自分を構成した傳統的日本人の思惟方法の惡しきを排し、良きを探るべき現在の自分をこゝで自己觀察中なのです。

思いついたまゝの事を述べて參りましたが一應これを以つて前後八回に亘つた「外國よりみた日本人の物の考へ方」の項を終らせて戴きます。では皆さんお元氣で。

アロハ。合掌



〔寫眞説明〕

ワイキキのリーフホテルにて。

白人に圍まれて東洋人只二人、左からカン

ボジャ國宗教大臣ダンマワラ師と小生。

アメリカ國務省の招聘によつて來布中のハワイアン・ミュージックの實況録音に招待されたもの。

==小=倉=の=上=人==



==鶴=田=湛=泉==

△▽

秀郷將軍九代の孫、蘭田次郎成基の嫡男、上野國の豪族蘭田太郎成家は、鎌倉の御家人として武勇の名高く、幼少の時から弓矢に勵みその道に秀でてゐた。

その頃、幕府も頼家の時代となり、ゆるぎなき地盤を得て世は治り、合戦の働きはなくなり、弓矢の腕を試すことの出来なかつた成家は、強弓を携へては日夜鳥獸を追ひ射獵をことゝしてゐた。壯年血氣な若者である成家は、それを唯一の樂みとしてゐたのであった。

たまたま正治二年の秋のこと、大番勤仕のために京に上つてゐた彼は、法然上人の念佛化導盛んで、貴賤の男女が吉水に足を運ぶ評判をきいて、ふと好奇心に馳られ庵室へ參じて、男女の多くの聴衆の中に交つてきいてゐた。ところが、その中彼は我を忘れてきき入つてしまつた。

「一切の生ける者は畜類に至るまで、身を愛し命を惜み子を思ひ夫婦の恩愛の情深く、物に恐れ憂ひ悲しむこと、みな我等とかはるところなし、而るにこれをわきまへず或は鳥獸を殺し或はいたため苦しめ慰めとなすこと、まことに愚なる仕業といふべきなり。万物一体、我が身の惜しきことを知るならば、小さき虫に至るまで心をとめよ。そもく佛心とは大慈悲心なり」

と靜かに説かれてゐた。

性來殺伐を好んで露ほどの慈悲心のなかつた彼は、肝もふるへるほど心も動揺して、いたづらに鳥獸を殺傷して來た残忍性が恥ぢられて來るのであつた。

あさましかつた自分の行爲を反省し、思ひ余つた彼は、終にその年の十月十一日、上人について出家してしまつた。この時、彼は未だ二十八歳の若者であつた。

法名を智明と貰つた彼は、上人の許にあつて六ヶ年の間給仕して淨土の教をしつかと身につけ修行成就すると、元年二年上野の國に戻つて來た。郷里に歸ると直ぐ家の子郎黨二十餘人に、教へすゝめて出家さしてしまつた。

やがて、上州赤城山の南方に當る酒長（サタケ）の御厨の小倉の里にさゝやかな庵室を建て、念佛にはげみ、教を人々にひろめていた。

その庵室の西一丁餘をへだて、一間四面の小さな阿彌陀堂を建て、お堂の妻戸に庵室の戸を開け合せるようにして、佛前にゆらく燈明を攝取の光明と思ひ見とれて、いつも「如來の光明は十方の世界を照らして、念佛の衆生を攝取して捨て給はず」と偈文を唱へ眞心を顯して犯した無益な殺生を懺悔し、如來の大悲に浴して救はれる喜びに啼泣していた。

かうして晝夜に念佛に餘念なく、一心不亂に菩提の道を求めている彼の風格を慕つて教を乞うものが續々と現われ庵を訪れる里の人々も、眞摯な彼の態度に感化されて念佛

せぬ者としてなかつた。世の人彼を小倉の上人と尊び呼んでいた。

△二△

この小倉の山里には鹿が多く、數千數百の鹿の群が餌を求めて野良を襲つて作物を荒し廻るので、百姓はほと／＼困り果てゝいた。が、こゝは禁中に供御の料を献する殺生禁斷の御厨領だつたので、射殺しもならず追ひ返したり、田畑に垣を張り廻らして鹿の害をからうじて防いでいた。農夫のこの非常な勞苦を思ひやり、且つは鹿のためにもと以前と人が變つたやうにやさしくなつた彼はせめてもの罪ほろぼしと、上田三町をさいて鹿の好む草をしげらせ、鹿田と名づけて鹿の食物にあてたのであつた。

一見彼の生活は隱遁者のやうに見えたが、その實、彼の教へるところは決して消極的なものではなかつた。

あくまで念佛を生活の中心に置いていた彼は、念佛のうちに世法を行へと教へた。

念佛の一部に全てを歸一さしていた彼は、百姓に田植のときの田歌にも念佛を唱へよと教へていたのであつた。

彼は農夫にかう説ききかせた。

一苗、一苗、南無阿彌陀佛、なむあみだぶ、と、一聲一聲に植え込むのである。念佛を唱へて植えると、自然と心をこめた植え方となる。さうすれば、一莖の中にも如來の

さゝやきを感じるであらう。やがて稔る一粒、一粒が、尊い辛苦の結晶であり、佛菩薩でもある。

一鋤、一鍬、一鎌に南無阿彌陀佛、なむあみだぶと、念佛を唱へて他念なく農耕にいそしむなれば、淋漓として土に落ちる汗もたのしい勤勞となつて、一鍬ごとに眞心がいり、煩惱に茂る草むらも、いつしかすき返へされかり取られ、田畑も清淨の地となり、五穀も清淨食となつて、之を食する人も煩惱を消滅することが出来るであらうと教へた。

一度び如來の大悲を知ると、大地は温かな脈膊を打つてゐることさへ感ずる。土地にも生命がある。土は一切の不淨を淨め、土地は一切の眠りを揺り起さしめる。さう感ずると、土を撫でゝ感激の涙さへそゞぐに至る。一握の土も押しいたゞいて踏まねばならぬ心地がするであらう。

たゞ一握の土塊の中から生れ出づる名も無き草の一輪の花片の裡にも、如來の大悲の美化が暗示されているではないか。

土地といふものの神秘さ、偉大さ、ありがたさに魂をうたれて、大地を抱いて自然に對する感激に心ふるゝき跪づきたくなるであらう。

土を耕す、種子を播く、實を摘む、その一つ／＼の農事の勞作の中にも、菩提を求める心があり、佛業成就の尊い姿がある。

萬事まめやかに、日々の一つの小さい事にも、心をいたして暮して行くことが念佛の生活であると教へた。

彼の大きいなる感化は、遙かに徳川時代にまで及んだものか。

「上野下野上總下總常陸武藏これらの諸國、農夫の口吟、樵夫の村歌にも、今の世までに念佛の外他事をいはず、思ふに坂東の俗、智明の教導を傳へて其の遺風今に在るとや」と、徳川中期の學者義山は、其著法然上人行狀翼賛に讚嘆している。

念佛の教理をあくまで明るいものと受けとつていた智明は、或年の元旦の祝にこんなことを始めた。

一人の僧は、庵室の庭前に進むと聲高らかに、

「こゝの庵の主に物申さん」

と呼つた。

「おゝ、何事ぞ」

智明は、出迎へて訊いた。

「されば、西方淨土からお参りが遅いから急ぎお参りあるよう。阿彌陀佛からのお使にござりまする」

「さ様か、大儀でござつた。まづこちらへ」

と、あらかじめ云ひ含めて使に仕立てた僧を客殿に招き入れ、丁寧にもてなし、種々の引出物を與へたのであつた。

これが、其の後續いて元旦の吉例となしたという。

鎌倉の執權北條時頼は、三十歳のとき執權職を長時に譲つて落飾し、法名を覺了房道崇と號し最明寺殿と稱ばれたが、宗から來朝した僧道隆を深く尊信し、又宗僧兀菴普寧の鐵槌によつて初めて大悟徹底したといはれている。けれども若冠の時分には、つねに小倉の草庵を訪ねて家成から念佛の安心をたづねていたのであつた。そんな時、いつも伴をするのは諏方入道蓮佛であつた。

諏方入道蓮佛は、幕府近侍の重臣であつて、家成と同じく法然上人に深く歸依していた念佛信者であつたので、幼い時頼のお守役であつた彼が時頼を訪ふて成家を訪ねたのであらう。

成家は、幼い時頼に、執權となつた時の心構として、「信心堅固にして如來の教を守る時には、三寶の光あらわれて國土自ら明となる」と説いた事であらう。

其の後、時頼と成家とは信交のあつたものと見えて、成家が七十餘歳となつた時、日頃愛用の栗の木を杖の時頼に献じた。

栗の木とは、西の木と書き、西方の行人としてふさはしい名であつたので多年使用していたものであつた。

時頼の禮狀の奥には、

老らくの ゆくすえかねて おもうには
つくぐうれし 西の木の杖
とあつた。

其の後數年経つた寶治二年、いさゝか健康を害した成家は、舍弟の淡路守俊基を招きよせてかう語つた。

「わしはもう老病で、今生の對面もおそらく今日限りであらう。お前も罪惡生死の凡夫であるから、必ず念佛してわしと同じように安養の淨土に參るようになされ、たとへ鹿鳥を食べる時にも、念佛を噛みまぜて食すがよい。敵に向つて矢を引くときも、念佛をすてゝはならない」

弟の顔にちつと瞳をそゝいで尙も語をつぎ、
「心弱くては武士の道に叶ふことはとても出來まい。されど、血氣にまかせの勇は、何程強しといつても、どこかに臆病なものである。先づ生死の念を斷つた勇こそが必要、念佛の利劍によつて生死の敵を裁斷して堅固の心をもてば、一人萬敵と戦う須彌山の如き大勇現われ不壞金剛の劍となる。なむあみだ佛と打ち込め、そこには生もない死もない」

と、かたみの言葉を與へた。

この頃の戦ひは、名乗りあげての一騎一騎の勝負であつた。そのため心は勇猛でなければならぬ。不拔の信念が必要となる。渾身の勇は念佛より出でゝ必殺の劍となる。戦場にて武功を建てるには、念佛こそ必勝の心構へである

と教へたのであつた。

△四△

常に京にあつて念佛の教を弘めていた法然上人の孫弟子に當る敬西房信瑞は、弘長二年の頃、布教のため關東へ下向して來た。

敬西房は、初め信空を師とし後隆寛律師に歸したが、學は廣く内外に通じ和漢の文に巧みで著作も數種あつた。泉涌寺の開山俄菴傳は彼の著であり、明義進行集（法然上人傳）も彼の著であるといふ。當時名聲の高かつた敬西房を慕つて、いたるところ貴賤男女が集つて來て彼の說法を求めた。

彼は、その時携へていた自作の法然上人の傳記一卷を時頼に獻じた。

幼い時から蘭田成家に導かれて念佛の教理に深い關心をよせていた時頼は、興味深く數日熟讀した後、法然上人の徳行を一層尊く思つて、念佛の安心を彼にたづねて來た。

敬西房は、時頼の問に對して、往生の故實、勤行（オツトメ）の文などを書いて獻じた。

その中に、念佛の現世祈禱について彼はかういつている。

「たゞ往生極樂のためのみならず、念佛の現世の祈禱となること、その證はなはだ多し、念佛はたゞ一向に後世の

ためのみにあらず、かねては又現世の祈ともなる條、和漢の傳記といひ、和尚の御釋といひ、其義かくのごとし、疑うことなかれ、……、たゞ單に往生のために念佛せば、はからざるに現世の祈りともなるべきなり」

それに對して時頼からは、

「故實ならびに勤行の文給ひ候ひぬ。よく／＼見覚え候て往生の心をすゝむべく候」

と、いよ／＼自行にいそしむ決心の程を自筆の返狀に書き送つた。

敬西房は關東の勤化を終ると、再び京に歸つて行つた。

△五△

弘長元年九月三日、時頼は日頃信寵していた辨の法印審範が病篤しときくと、親しく病床を見舞つた。

法印は顯密の學に通じた碩學だつたので、これが最後の對面と思つたのか、兩者の間に顯密の法問について熱心な問答があつたが、時頼は、安心のためには念佛を唱へることをねんごろにすゝめた。

時頼は歸館に際して、法印に向つて、
「引接念佛の願は、かへす／＼もたのむべきである」と重ねていひ置いた。

時頼は、禪によつてその深い妙境に達し大悟を開いていたのであつたが、尙彌陀の大願を厚く信じていたのであつ

た。

弘長三年の年の始めから引籠り勝であつた時頼は、自分の死期の近づいた事を豫感したものか、三月十七日には、信濃國深田郡の水田六町を買ひ求めて善光寺に寄進し、來世安樂のために念佛三昧の勤行をたのみ、念佛衆の糧料にあてゝいる。

十一月廿二日、いよいよ重態となつた時頼は、最明寺の北の亭に入つて見舞客を謝し、靜かに臨終を待つた。

その日、鎌倉に大火があつて幕府は火焰につゝまれ、將軍は一時避難した程であつたが、幸ひ大事に至らず鎮火した。

時頼の最後の模様を近侍の老臣、諏方入道蓮佛右兵衛尉成重が敬西房に詳しく傳へて來た。

時頼は、唐物衣を着て袈裟をかけ、西の方に阿彌陀佛像をかけ、椅子によつて威儀を正し、少しも亂れず合掌して大往生を遂げたという。



基金寄付者御芳名 — 第一回 —

一、一口	金壹千圓也	東京	野村法衣店様
一、〃	〃	〃	伊藤知源様
一、〃	〃	〃	戸松學瑛様
一、〃	〃	〃	戸松啓眞様
一、三口	金參千圓也	岩手	昆野秀賢様
一、一口	金壹千圓也	大阪	三枝樹正道様
一、〃	〃	東京	大村興道様
一、〃	〃	東京	西應寺様
一、〃	〃	青森	工藤昌瑞様
一、〃	〃	神奈川	西念寺様
一、三口	金參千圓也	東京	須藤とし子様
一、一口	金壹千圓也	青森	赤平昌導様

(到着順)

右御芳名を掲げ、御尊志に厚く御禮申上ます

法然上人鑽仰會

觀無量壽經講話——その二——



王舍城の悲劇

佐藤賢順

觀無量壽經は摩揭陀國の都、王舍城に起つた歴史的な悲劇が原因となつて説かれたお経であつて、繪巻物を擴げられるように、その物語が繰り擴げられてゆくに従つて、いろいろと法が説かれていく形式になつてゐる、ということは昨晚お話したことです。今晚はその物語のあらましをお傳えしましょう。

印度の北西の方から南東へかけてガンジスという大きな河が流れてゐることはどなたも御承知でしょうが、この中流の一區域が昔、釋尊が遊化せられた地域でありまして、この物語もこの地方で起つたことです。釋尊が弟子達とともに遊化した最も南の地方の摩揭陀國がその舞臺であります。

す。

インド・アーリア民族は西暦紀元前七世紀か六世紀頃には、すでにガンジス河に沿うて南下してきておりまして、その頃その地方には相當の文明が榮えていたのです。當時インドには十六カ國の獨立した國がありまして、その名もおよそわかつております。その中でも大きい國が四つあつて、小さい國は次第に大きい國に征服されたり屬國にされたりしてしまいました。この四つの國のうちでも特に大きかつたのが、北西の喬薩羅こさろと南東の摩揭陀まかたで、この二つが釋尊當時の「二つの世界」として互に對抗していたのであります。

このマカダ國は紀元前六百年頃にシスナガ王という王によつて作られた國で、それから四代目の王に頻婆沙羅という王がいました。王は五十年の間在位して、賢明で民を愛したので、なかなか人望があつたということです。その王妃が韋提希で、これが宮廷悲劇のヒロインです。頻婆沙羅王と韋提希夫人との間に、阿闍世という世継ぎの王子があらします。これだけならば悲劇は起らないのですが、ここにもう一人悪役として提婆達多が登場してきます。提婆は釋尊の從弟に當ります。

釋尊は喬薩羅國の舍衛城の祇園精舍に止まつていたり、南に下つてこのマカダ國の首府王舍城外の耆闍崛山に滞在せられたりしました。耆闍崛山は靈鷲山のことでありまして、ここにはかなり度々滞在したようであります。釋尊がここにゐる時、頻婆沙羅王も韋提希も釋尊に深く歸依してしばしば華やかな行列で訪れたり、禮を厚くして宮廷へ迎えて法を聞いたりしました。

提婆は初め釋尊の弟子でしたが、名譽欲の強い野心家で自分が釋尊に代つて教團の指導者になろうという野望を持ていました。それにはやはり權力に結びつくことが近道なので、秘かに王舍城の太子阿闍世に取り入つてこれをそゝのかしました。阿闍世は當時十六歳で、まだ世間の事は何

もよくわからなかつたので、提婆におだてられると、提婆のために別に寺を立てやり、毎日のように車や人夫に莫大な衣服や食糧を運ばせて供養したのでした。

提婆は或日あつかましくも、釋尊の所へ出かけていつて釋尊にこういいました。「世尊はもう老年になられて法をお説きになるのにもお骨が折れることでしよう。私が代つて弟子達の教養をしますから、御隱居なさつてはいかゞですか」。すると釋尊は、「私は舍利弗や目蓮のような立派な弟子達にさえ、あとを譲らうとしないのに、お前のような名譽のため利益のためには、人の唾でも食おうとする者にどうしてあとが委せられるか」といつて叱りつけたのでした。提婆はこれを深く遺恨に思つて、新參の比丘五百人をだまして釋尊の教團から分裂して、自分の方へ引きつれてきました。そして指導者顔をして得々としてこの五百人に法を説いていました。これを憂えて舍利弗と目蓮が提婆の新教團へ乗り込んでいつて、五百人の比丘にその誤りであることを諄々と説き聞かせて引きつれて歸つたというようなこともありました。

提婆はいよいよ焦つて、早く自分の野望をなし遂げたいと思つて、ある日、阿闍世をたずねて、「太子よ、父君はいつまで王の位におられるのですか。父君がこの世にある

間、太子は王になることはできません。太子は一日も早く父王に代つて王位を繼ぐようになさい。私も世尊に代つて法の王となりましょう。そして新しい國王と新しい佛陀とが相並んでこの國を治めようではありませんか。」とまたそのかしました。さてこゝから先が觀無量壽經の叙述になります。

阿闍世はだまされるとその氣になつて父を殺そうとして七重の室内に幽閉し自分が王位に上ります。父には番人をつけて嚴重に監視させ、食物を與えないようにします。王妃の韋提希は、惡逆な友にそゝのかされて實の父を幽閉した自分の一人息子の行爲を悲しみ歎いて、王の身を心配するので、監視が嚴重で救い出すことも食物を運ぶことすらもできません。そこで韋提希は自分のからだを綺麗によく洗つて、酥蜜しやうみつといつて牛乳から精製したミルクのようなものに蜜をまぜたものを、からだに塗り、瓔珞といつて首かざりのような装身具の中へ葡萄ぶどうのジュースのようなものを仕込み、密かに王の所へ忍んでいつてからだの蜜を食べさせ瓔珞の果汁を飲ませました。時には釋尊のお弟子の目連などがこつそり尋ねて、いろいろと精神的に勵まし慰めていましたので、二十一日たつても王の元氣は一向衰えず、心も落つているようでした。

阿闍世は時々牢獄の中の様子を窺つて、番人に、「おやじはまだ生きてゐるか。」と尋ねます。番人は、妃がからだに麝蜜を塗り瓔珞に果汁を入れて訪れてゐること、目連などが來ては慰めてゐることを語りますので、阿闍世は激昂して、ついに母を殺そうと決意します。「母は國賊をかばつてゐるから、母も國賊である。目連たちも妖しげな術を以て父を生かしておくから惡人である」と叫んで、劍をとつて母に迫ります。それを見て、側にいた大臣の月光がっこうと侍醫の耆婆きばとがあわてゝこれを制止して、「昔から太子が王の位をとるために父を殺したという例は澤山あります。しかし無道にも母を殺したという太子のことはまだ聞いたことがありません。そのような事をなさるなら、刹帝利族クシャトリヤ（武士階級）を汚すものであつて、梅陀羅メダラ（賤民）の行爲にも等しいことです。」といつて、この二人も劍つるぎに手をかけて、二三步退いて、身がまえます。阿闍世もこれには恐れをなして、劍を捨てて母を害することだけは思い止まりますが奥深く幽閉して外へは出しません。

幽閉せられた韋提希は、思い悩みやせ衰えてしまいました。はるかに釋尊がまします耆闍崛山ガヤトリーの方に向つて禮拜して、こういいます。「世尊よ、かつては世尊は、お弟子の目連や阿難を遣わされて、私をしばしば慰めて下さいまし

た。今、私は苦しんでおります。世尊御自身では勿體ないことですが、せめてお弟子をでもよこして私に慰めを與えて下さい」そう願いました。はるかな所にいる釋尊は心の澄み切つた人の直感力でこの願いを感じとり、たちまちに目蓮や阿難とともに、韋提希の所に現れます。身は金色に輝いて、百寶の蓮華の上に坐して眼の前に現れた釋尊を見ると、韋提希は昂奮の餘り身につけた瓔珞を斷ち切り、からだを大地に投げつけて、大聲で泣き叫びます。そして言います。「世尊よ、私は前の世に如何なる罪を犯した報いでこのような惡逆の子を生んだのでしょうか。世尊も何の因縁があつて、提婆のような親屬をお持ちなのでしょうか。」

「世尊よ、私のために惡人のいない、苦しみのない所をお教え下さい。そこへ生れさせて下さい。」とすがります。そこで釋尊は、不思議な力を以て、十方の淨土を見せてやります。韋提希がその國々を見廻しますと、いずれの國々もみな清らかに美しく輝いていますが特に阿彌陀佛の西方極樂が美しく清からであるので、「世尊よ、私をあつた國へ生れさせてください。どうしたら生れることができるでしょうか。教えてください。」と教えを乞います。世尊は韋提希の哀れな心持を察して法を説きます。そこでまず説き出されたのが三福の教え、次に極樂世界を觀想する十三の方法と散善の教えであります。こうしてだんだんと深い難しい教が説かれますが、終りに釋尊は、今まで説いてきた事が

難しくて行えないならば、ただ南無阿彌陀佛と稱えることでよろしい、それを忘れぬように……その一聲一聲の中に長い間の罪を除き迷いをのがれる法がこめられているのだと教えたのであります。この教えを聞いて韋提希はもとより、それにかしづく五百人の侍女も、心は開け喜びにみち悟りすなわち眞實の智慧を得たというのが物語の荒筋であります。

さて阿闍世はどうなつたかそれについてはこのお經には何事も書いてないので、ほかのお經で補つてお話しますと次のようになります。彼は母の慈愛にあふれる諭しを受けて惡夢から醒めたように本心に立歸りますが、その時には父の頻婆沙羅は長い間、ろくに食べ物も與えられず監禁されてしまったので、身心ともに憔悴して、ついに命を失つてしまいます。阿闍世が驅せつけたときにはもう事切れたあとでした。如何に歎いても及ばないことでした。しかし彼はその後、釋尊の歸依者となつて、深くその教えに歸依し、三十數年に涉つてマガダ國に君臨して、大いにその國力を伸したということです。

また、提婆はどうなつたか。彼は依然として野望を捨てず、執拗に釋尊に食い下つて、これを亡き者としようと機會をねらつていましたが、或る晩、教團へ忍び込む途中で大きな岩穴へ落ちて死んでしまいました。人々は提婆は地獄へ落ちたと噂し合いました。——つづく——(大正大學教授)

「浄土」の健全なる發展のために

皆様の深い御支援を御願ひ申上ます

本會は、日本浄土教の開祖法然上人の偉大なる芳躅を慕いつゝ鑽仰運動を展開してより廿有餘年、爾來今日に至る間、時代の苦悶に喘ぐ社會の眞只中にあつて、正しき上人の思想信仰を弘化し、以て淨佛國土成就衆生の悲願を達せんがために、月刊宗教雜誌「浄土」をはじめ幾多の出版物を刊行し、其の眞使命を全うして居ります。

しかも、私共は昭和三十六年に迎える法然上人御遠忌七百五十年を眼前に控え、思想の混沌と民心の動亂する現代にこそ眞佛法の開顯が要求され、愈々法然上人の慈悲のみ教えが渴仰されるとき、本會の責務の轉た重大なることを痛感するのであります。

然しながら、本會も創艸以來自立獨歩して他の援助を蒙むることなく、會員皆様の御協力に依つてのみ維持して参りましたが、戦後の時代的不況の中にあつて多事多難に遭遇し、未だに幾多の苦境に當面致して居ります。只逸早く本來の姿に還るよう懸命の努力を拂いつゝも尙御期待に添い得ず、御迷惑をお懸けして居りますが、何より現代の本會の推動力となつて居るのは、本會創立以來關係者一同の物心兩面に亘る絶大な御援助と惜しみなき御奉仕によるのであります。

茲において、本會の一層の發展と所期の目的を達成せんがために、會員及び有縁の皆様方の深い御理解と御同情により基金を募集致し、更に力強く歩むことに致しました。

何卒、趣旨御理解の上、一口千圓、應分の口數において御助成を賜りますよう切に御願ひ申上ます。

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法 然 上 人 鑽 仰 會

編輯後記

○ねはんの月である。ねはん畫像には、諸天善神高弟たちにまじつて禽獸までが佛陀の入滅を嘆き悲しんでいる。これは象徴的圖であるがまことにすばらしい。事實限りなき佛陀の慈光に浴し溫容に接したものが今生に別れを告げる様相は畫像に表現された以上のものかもしれない。ちつとみつめてみると圖の奥にある深いところが強く響いてくる。

○行事は、自然と人間との協奏曲ともいえよう。庶民の折々のねがいが語られるものである。今日のわれわれの生活から心なしか佛教行事の影がうすれつゝあるのは、たえがたいわびしさである。

○しかしこれは時代の轉換のしからしむる處といつて手ばなしにはできない。新しい行事をつくられていくような働きがあつてもよからう。

○實際、この世から慈悲と光をとり去つたとしたら、ねはん圖に描かれていゝような悲しみが湧きあがり、常闇となることだろう。

○本會では昨年末より強力なる運動を展開するために會員有縁の各位に呼びかけて基金を募集している。思わぬ方から多大なる淨財を賜つて一同感激しているが、一層の御協力をおねがいしたい。

○本號は働くものへの特集として後藤眞雄、谷部禪雄兩師より玉稿をいたゞきページを飾ることができた。日々營々と勤勞する人々の心をやすらげ、明日への糧となれば幸いである。(宮林)

○ウインター・イズ・オーバー・スプリング・ハズ・カム、で立春を迎えたがなか／＼どうして寒い「神武以來」……やめましょう。

○永井荷風氏が日本の「凱旋門」と絶讃する増上寺山門、大部いたんで来たが、四百萬圓の豫算で屋根瓦の修理に取りかかるそうだ、次は改體再築、末ながく後世に残

したいものだ。

○もう一つ、美男でおあす鎌倉長谷の大佛さまは、文部省文化財保護委員會で新國寶指定の候補(現在重要文化財)にあげ、その美術的價值について精密調査を行うとのこと。

○本誌の發行日もようやく月初めにこぎ着ける事が出来た、前月發行を目ざして努力致します。一層の御助成をお願い申し上げます。

○次號三月號は「彼岸法話」を石橋誠道臺下に御執筆いただいたのを初め、説教講話は「病床の人々え」その他、本號休載させていたいただきました「宗門人各界展望・教學の巻」の第二回。第三回を迎える佐藤賢順先生の「觀無量壽經講話」等誠意編輯中です。御期待下さい。

○前金切の通知が大部遅れておりますことをお詫び致すと共に、近々に通知申上げます故、折返し御送金願います。(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨土」二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十三年一月廿五日印刷
昭和三十三年二月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人續仰會

振替 東京八二一八七番

値段改正中 材料値上りの爲お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達賃費（都内横濱 500 圓以内
其他1000圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）
組立説明書送付



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75) 1024 (池上驛東3分)

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いておられます。松
答・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。

幼稚園 保育園 運動遊具

發賣中

宗祖法然上人七百五十年御忌記念出版

淨土宗日常勤式

○定價 一部金三十五圓

十部以上（一部につき三二圓）

百部以上（一部につき三〇圓）

送料實費

○オフセット・美麗折本（香澤梵成師名筆）

内容（和讃勤式付）（吉田定久譯）

△香偈 △三寶禮 △三奉請 △歡佛偈 △懺悔偈 △三願禮

△開經偈 △四誓偈 △本誓偈 △一枚起請文 △攝益偈

△念佛一會 △別回向偈 △總回向偈 △四弘誓願偈 △三身

禮 △送佛偈

お申込は

淨土宗教化團中央本部へ

東京都港區芝公園十九號地淨土宗務所内

淨土宗教化團中央本部

振替東京六一九三九番
電話芝(43) 一三八二番